第２節　前期古墳の埴輪－大和東南部地域の初期埴輪を中心に－

１．はじめに

古墳成立期の埴輪については、近年その出現の背景であり政治中枢を担う地域圏とされる大和東南部地域において資料の増加が見られている。そして、古墳墳丘を飾る外表施設としての埴輪そのものの成立から畿内周縁部への波及にかかる形態、製作手法等の諸要素の集約がこの地域圏において醸成されたことを確実視する状況が認められている。

小稿では、大和東南部地域の大和古墳群を埴輪出現の起点とする前提のもとに現状における幾つかの前期古墳の埴輪類の様相を概観しつつ、その波及についても考えておきたい。なお、時期的には埴輪の初現期から前期前半期に限定したものとなることを予め断っておくものとする。

２．大和古墳群の初期埴輪

大和東南部地域の奈良盆地東部山麓沿いには大和・柳本古墳群の大型古墳の築造が連続的に進められ初期王権の中枢地域圏を背景とした前期古墳群地帯として知られている。特に、天理市萱生町と中山町の一帯に展開する大和古墳群では、埴輪の起源でありその祖形とされる宮山型特殊器台あるいは都月型・特殊器台形埴輪の出土する古墳が多く認められている。

以下、最近の大和古墳群の調査により知られる初期埴輪（都月型・特殊器台形埴輪を含む前期前半期の埴輪を便宜上ここでは初期埴輪と呼称する）の事例について概観しておく。

①中山大塚古墳（奈良県立橿原考古学研究所編1997）

以前に採集された宮山型特殊器台片に加えて墳頂部より都月型埴輪と円筒埴輪、特殊器台形土器と特殊壺形土器等が出土している。

墳頂部出土の埴輪類には筒部内面が精緻な削り調整される点で共通し、器壁の厚さ、筒部径、突帯の大きさによって２種に大別可能であるとされる。これらの埴輪の口縁部形状には有段口縁と外反口縁があり、有段口縁で文様をもつものを都月形としている。ほかにも宮山型特殊器台に通有の文様モチーフが見られる特殊器台形土器やや体部下半のみ残る２、３条の突帯を巡らして赤彩された特殊壺形土器の存在も確認されている。これら埴輪類と特殊器台の組成は、現状で確認される資料としてはもっとも古相を示す一群と評価できるものである。

②西殿塚古墳（天理市教育委員会編2000）

これまでにも、墳丘上において宮山型特殊器台、都月型円筒埴輪の出土が確認されていた（福尾1991）が、墳丘東裾部の調査でも多くの埴輪資料が得られており一応の埴輪組成を知ることができる。

埴輪類の胴部は内面をハケやナデで仕上げるものがほとんどであり、削り調整はほとんど認められない。外面は画一的な手法のタテハケを多用する。

突帯の付加に際しては刺突技法が必然的に施される。

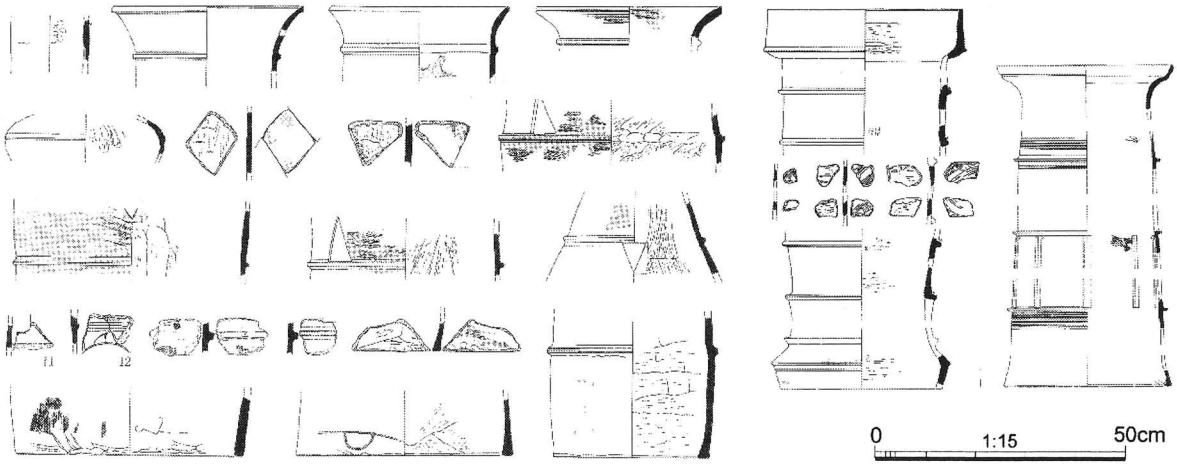
透かし孔の形状は、三角形が多く半円形のものも見られる。穿孔位置については突帯間で四方に穿つものと考えられている。

口縁部形状には、疑似口縁を成形後に有段口縁を積み上げるもの（A類）、口縁部を先端まで立ち上げた後に有段部分に強い屈曲を成形したもの（B類）と少量であるが直立あるいは外反気味の口縁に口縁端に近い位置で突帯を付加するもの（C類）がある。

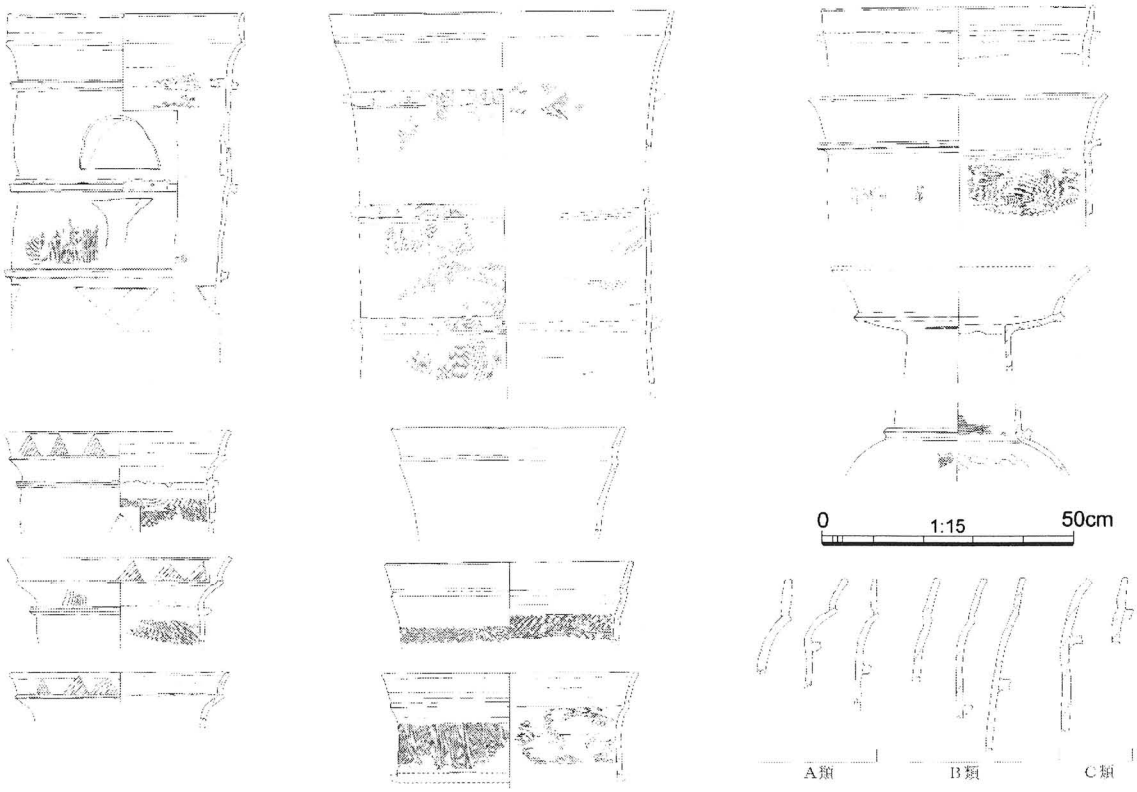
また、これらの円筒埴輪のほかに、頸部が内傾直立して有段口縁が取り付く壺形埴輪や形象埴輪の初現的形態を示す器種不明の器財形埴輪のようなものも確認されている。

③東殿塚古墳（天理市教育委員会編2000）

東殿塚古墳の埴輪は、製作手法あるいは形態的な特徴からも特殊器台形埴輪・特殊円筒埴輪から普通円筒埴輪への過渡的様相を示すような内容をもつ。ここではそうした初期埴輪類の器種組成と口縁部等の細部形状、突帯および鰭部の接合形態、手法等の詳細を提示しておきたい。



中山大塚古墳の埴輪



西殿塚古墳の埴輪

第27図　大和東南部の初期埴輪１(S=1/15)

埴輪類には、鰭付き円筒埴輪、鰭付き楕円筒埴輪、内傾型円筒埴輪、朝顔形埴輪、壷形埴輪および不明小型埴輪の５種類が認められる。そのなかでも鰭付き円筒・楕円筒埴輪と朝顔形埴輪に極めて特徴的な様相を見出すことができる。

鰭付き円筒埴輪には段数が２段、３段で低い小型品と４段および６段の大型品の３者に区分され、４段の大型品のみに限られ胴部に記号文や絵画の線刻が付される。また、鰭部には円形、長方形、巴形の透かし孔が穿たれ、鰭部周縁の粘土帯貼り付け装飾の施されるものもあり極めて特異な在り方を示す。

朝顔形埴輪では、壷部と円筒部との間の形状に特徴があり、初現的な様相が窺えるものである。

巴形と三角形で構成される胴部の透かし孔や簡略化の進む蕨手文や直弧文、直線文等の線刻文様施文のものが多く見られるが、鰭部を付加するものは認められない。

内傾型円筒埴輪としたものは幅広な突帯間に線刻文様が施文される長身で先細りの特異な形態を示すものである。口縁部付近の形態は不明であるが透かし孔の形状と配置、胴部形態が特徴的な埴輪である。

壷型埴輪には壷部形状の異なる２種類の形態が存在する。壷形埴輪Ａが朝顔形埴輪の壷部とほぼ共通した畿内的な二重口縁壷の形態であるのに対し、壷形埴輪Ｂでは吉備地域の特殊器台とのセット関係を示す「特殊壷」に類似した形態である点が注目される。

不明小型埴輪は底径、口径の小さな著しく小型の埴輪であるために他の埴輪と組み合わせての使用も考えられるものである。

これらの埴輪類の調整手法については内外面調整の看取可能な資料全体を見る限り基本的にナデを多用する丁寧な作りのものが多いことが知られる。ハケ目調整にはヨコハケ、タテ・ナナメハケの両者が認められるが、いずれも一次調整のみに使用される場合が多く、その後にナデ調整されるものも多数認められる。内面削り調整については大小の埴輪に見られるが、基底部付近あるいは口縁、頚部以下の内面全体に施されるなど多用な在り方を示している。いずれもその際、倒立技法による成形が同時に看取される様相を偏在的に認めることができる。また、外面の赤色塗彩を加えるものも頻繁に見られ、その比率は高いと思われる。

壷形埴輪、朝顔形埴輪を除く各種埴輪類の口縁部形態には有段、単純屈曲、直口の３系統があり、さらに細部の特徴からも類別することができる。有段系には大きく外反する形態と短く立ち上がる形態の２種がある。単純屈曲系は口縁部を短く外側に屈曲させるものを総称するが、頚部に突帯を付さない簡素なものと頚部直下もしくは若干の間隔をあけて突帯を巡らすもの両者が認められる。直口系では口縁端の直下に突帯を巡らすもののみが見られる。

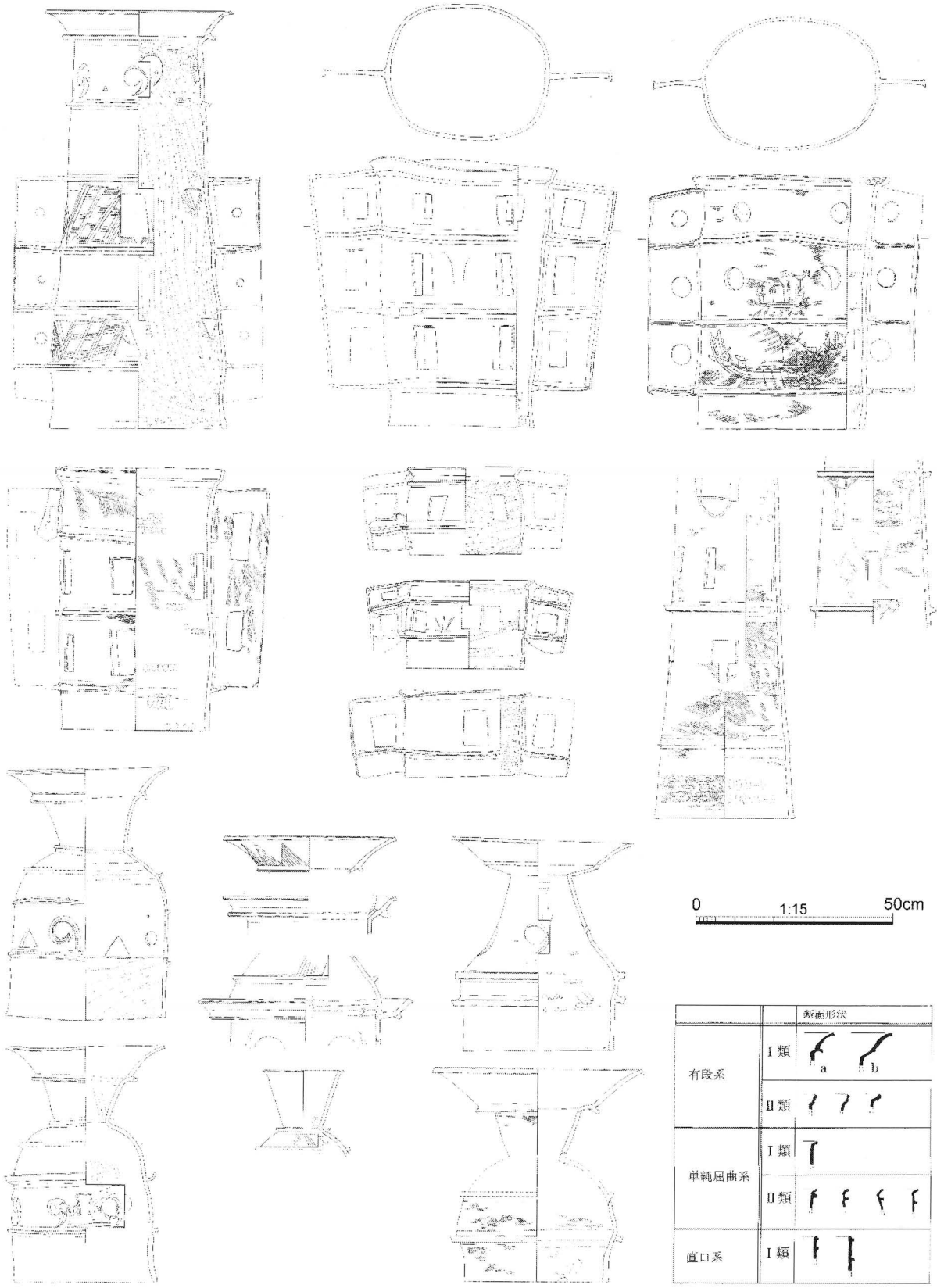
朝顔形埴輪では円筒～壷部間の形状が極めて特異なものとなっている。従前より古式の朝顔形埴輪の特徴とされた円筒部上位の突帯間隔が狭い在り方ではなく、壷胴部にも突帯が巡り円筒部口縁が有段を成す点が埴輪の起源と考えられる特殊器台と特殊壷との結合形態に近い様相を示している。こうした特徴は吉備地域の特殊壷と特殊器台のセット関係から一体化した埴輪としての確立の過程を斬移的に示す過渡的な形態として注目されるものである。また、付随要素として壷部と円筒部の境に多方向に貫通孔を穿つものも見られ、他にも突帯を垂直に貫通したものも存在する。これらの用途は不明であるが、何らかの付随物を挿入して樹立埴輪を飾るための軸受け穴とも考えられよう。

鰭付き埴輪の鰭部形状は一様ではなく数種類が認められる。全般として幅広で透かし孔や周縁部を飾る重厚な作りの鰭部に着目されるが、細部においては多種多様であると言える。鰭部周縁の状況からは上端面に粘土板を貼付するものが多く上肩部を飾る点で共通する。

突帯の設定・付加の技法には方形刺突、ヘラ状工具の縦位圧痕あるいは沈線を巡らすもの３種類が看取される。方形刺突は一辺５㎜前後の方形の工具端を胴部の突帯貼り付け部分に押捺するもので、ほぼ等しい間隔で施されている。ヘラ状工具の縦位圧痕も同じくほぼ等間隔に施されるようである。沈線には１条あるいは重複して２条巡らされるものも見られる。他に、沈線とヘラ状工具の縦位圧痕を併用したものも見られ、こうした技法が単一技法のみの使用に限られず複数技法の組合せによる使用が併存したことを示している。

鰭部接合部の設定技法では接合剥離面の観察により縦位に複数のヘラ描き沈線様の乱雑な傷付けを施すもの、縦位の傷付けに加えて直交する横位の複数のヘラ描き沈線を施すもの、それに接合面の一面に高い密度で扁平な半円、長方形を成すヘラ状工具先端による刺突を数多く施すもの３種類の技法が確認されている。

透かし孔の形状は多種多様である。特殊器台の文様構成に起源が求められるような巴形、三角形、分銅形に加えて単純な円形、正方形、長方形があり、他に正方形と長方形を組合せた前方後



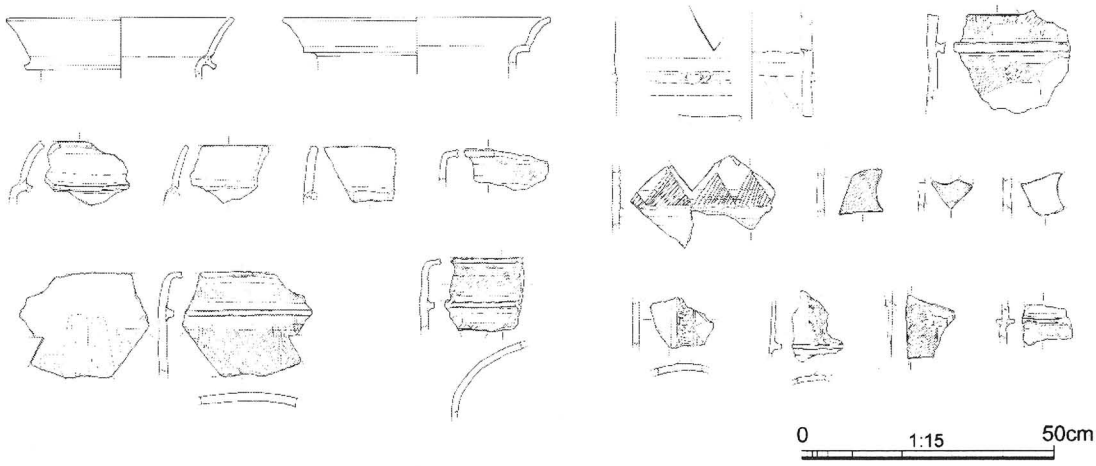
東殿塚古墳の埴輪

第28図　大和東南部の初期埴輪２（S=1/15）

方形のような特殊な形状を呈する透かし孔も認められる。これら各形状の透かし孔に統一性は無く、多用な透かし孔形状が同時併存する在り方を示していることが特徴的と言える。穿孔位置では大半の埴輪が２段目より上位での穿孔となるが、１点のみ基底部に円形透かし孔を穿つものが見られる。

④波多子塚古墳（天理市教育委員会1999）

以前より知られる置田雅昭・山内紀嗣両氏による墳頂部採集の埴輪片（山内1992・青木1998）では赤彩された特殊器台形埴輪や鋸歯文の線刻のある小片、巴形、三角形の透かし孔の部分的な残片、それに特殊壺形埴輪の突帯部分や鰭付き円筒埴輪の鰭部小片等が含まれていた。そして内面



波多子塚古墳の埴輪

西山古墳の埴輪

第29図　大和東南部の初期埴輪３（S=1/15）

削りの多用と吉備系胎土の存在が特徴的であるとの指摘とともに、当時の山内氏の見解では特殊器台形埴輪の内でも新しい段階として位置付け、中山大塚古墳・箸墓古墳・西殿塚古墳等の一群より新しく東殿塚古墳の埴輪より古い様相を示すが鰭付き円筒埴輪の存在から東殿塚古墳に近い時期と考えられていた。

近年の後方部西側裾部の調査(1998年度天理市教育委員会調査・本報告)では周濠埋土より多くの埴輪類の破片資料が得られており、前述の編年観を若干修正することが可能な成果が認められた。

調査時出土の埴輪類には従前より知られた組成に有段口縁系や直口口縁系の口縁部、鰭付き円筒埴輪、楕円筒埴輪等の要素も加わり、胴部外面に三角形透かし孔の多用や鋸歯文の装飾的な線刻の見られるものも確認している。前記の東殿塚古墳の埴輪組成に近く有段口縁の退化、鰭付き円筒埴輪の鰭部形状や楕円筒埴輪の定着、直口口縁系の増加等の諸要素からその直後の段階に位置付けられるものと思われる。

3．おわりに

前期前半期各段階の埴輪類の現状での組成と諸特徴についてのみに紙面を費やしてしまったが、ここでまとめにかえて現時点の知見からの私見を示しておきたい。

大和東南部の初期埴輪では、各古墳ごとに吉備系特殊器台と特殊器台形埴輪の併存は確実であり、従前の特殊器台片採集古墳を古相とする編年的位置付けは的確ではないことが知られつつある。そして、朝顔形埴輪や鰭付き円筒・楕円筒埴輪出現期の東殿塚古墳の埴輪組成が布留式初頭土器群の共伴により時間的な定点を成すことからその前後の時間的序列を示すことができる。その場合、前掲器種出現以前では特殊器台系要素の強い中山大塚→西殿塚の順に、以後では波多子塚→杣之内古墳群・西山古墳(竹谷・廣瀬2000)とした序列が考えられる。これらの変遷に要した時間幅は埴輪様相の推移から見てもさほど長くないと思われ、東殿塚古墳築造以後に畿内周縁の古式古墳の埴輪に前代的な口縁形態の残存等の影響を与えたのであろう。

参考文献

奈良県立橿原考古学研究所編1997 『大和の前期古墳下池山古墳中山大塚古墳調査概報付．箸墓古墳調査概報』学生社

天理市教育委員会編2000 『西殿塚古墳東殿塚古墳』天理市埋蔵文化財調査報告第７集　天理市教育委員会

福尾正彦1991 「衾田陵の墳丘調査」『書陵部紀要』第42号　宮内庁書陵部陵墓課

天理市教育委員会1999 「波多子塚古墳の調査成果について」『平成10年度奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会

山内紀嗣1992 「波多子塚古墳の特殊器台形埴輪」『季刊考古学』第40号　雄山閣

青木勘時1998 「大和東南部の前期古墳について－天理市東殿塚古墳の調査成果を中心に－」『古代』第105号　早稲田大学考古学会

竹谷俊夫・廣瀬覚2000 「天理西山古墳外堤出土の埴輪棺墓について」『天理参考館報』第13号　天理大学付属天理参考館